



# 筑紫女学園大学リポジット

## On the Stone Image found at Hirosawa-tomb

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 堯俊, YOSHIMOTO, Takatoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/244">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/244</a>

# 広沢古墳出土の石彫品

## 尊崇されない単身像造形の例として

吉 本 堯 俊

On the Stone Image found at Hirosawa-tomb

Takatosi YOSIMOTO

### はじめに

歴史考古学演習と言う科目を担当した折、その歴史考古学と言う看板の下、石造美術は必須の要素であり、就中、石仏は、学生達にも人気の高いテーマであった。その初講の冒頭、この小文のテーマの図1の石彫品をスライドに映写、「この作品は、どの地域の作品と思いますか？」と質問してみた。最も多かったのが、アフリカであった。ピカソを魅惑した木彫品を記憶していたのであろう。次が、イースター島であった。巨大な石像との連想であろう。三は、インドであった。ヒンドゥ教諸神の奔放な肢体の表現に、共通するものを感じたのであろう。

勿論、学生達は、正直に答えたのであろう。その正直な印象の要約は、「非日本的」という点に尽きるであろう。その「非日本的」、つまり、「墳輪的」でもなく、また、「仏像的」でもないと言う要素の震源の追求こそが、この小文の趣意である。

この小文の作成に際して、この古墳の調査と報告（註1）を担当された、京都大学名誉教授・樋口隆康博士、京都大学教授・上原真人博士、筑紫女学園大学教授・緒方知美博士から御好意を賜った。心からの謝意を呈上したい。

### 1. 広沢古墳

この小文は、主題である石彫品の本質に触れようとするものであり、出土地点である古墳の詳細については、註1前掲書を参照されたい。故に、この節においては、文章・解釈ともに、その引用に留める点を付しておく。

広沢古墳は、芭蕉の名吟で著名な広沢他の南岸から、南へ150mの地点、府立堀川高校のグラウンドの東南隅に立地する小円墳である。

#### 1. 石室 横穴式石室 南に開口

全長 約12m 玄室 約4.3m 羨道 約7.7m

石室幅 玄室 2.4~2.2m 羨道 1.9~1.8m

	石室高さ	玄門	約1.8m	羨門	約1.3m	
	敷石	玄室の西北隅には敷石なし			石棺安置と推定	
2. 石棺	小破片のみ	散乱して出土	凝灰岩	組合式家形石棺		
	蓋石	幅 1.7m	深さ 4 cm	低い縄掛突起		
	自然の破壊ではなく、第2次埋葬（火葬骨）の際になされたものか。					
3. 遺物	須恵器	器形を残すもの		18点		
	土師器			3点		
	瓦器	土釜		数点		
	鉄器	斧 1点	釘	16点	鋸	1点
	古銭	隆平永宝	1点	延暦 15 (796)	年	鑄造
		富寿神宝	1点	弘仁 9 (818)	年	鑄造
	火葬骨	玄室西南隅 (図1の6 赤十字印)		古銭2点を伴出		
	石彫品	厚さ16cm	長さ65cm	石棺の側石か底石の転用		
		縦24cmの楕円形の顔面を彫刻				
		杏仁様の眼 歪んだ鼻 大きく結んだ口				
		吉備姫王墓 (奈良県高市郡坂合村) の石彫像と合通するものがある。				
		稚拙ながら、ひとつの風格を備えている。				
	油皿	多数				

## 2. 石棺解体の時期

この小文の主題は、この古墳出土の石彫品である。この遺物は、この古墳の第一被葬者の葬棺である石棺を材として彫成されたものである。故に、この石彫品の制作年代を知る上に、この石棺が、盗掘者によって解体された時期の究明が、その出発点と言う事になる。

その作業の第一として、調査者による、この古墳の変遷を見ておこう。

第1次埋葬	石棺	調査者は、玄室の西北隅と推定
第2次埋葬	火葬骨	蔵骨器に木箱を想定 皇朝十二銭の伴出
		この埋葬時に、石棺の破損を想定
第3次の土俗信仰	多量の油皿を入れた時期	
近世以降	崇拝の対象外	塵捨場 内部の堆積

まず、石棺の位置を推定すると、石室の西北隅と言う、調査者の観察を尊重、平面図に記入したのが、図1の6である。石棺の主軸線の東西と南北の両者、ともに記入した。

この図を見ると、玄室の南半が、ガランと空いている点が認められるが、何故に、玄室の西南隅に、こっそりと、火葬骨を埋葬したのであろうか。

それは、追葬の想定 of 欠落から生じた誤解であろう。玄室の南半は、空虚な状態に放置されてい

たのではなく、木棺（群？ 羨道にも可能）が追葬されていたと見るべきであろう。その木棺の残骸（盗掘され易い木棺は、その蓋然性は極めて高い）に接し、畏怖の念から、そっと、玄室の西南隅に、火葬骨容器を安置したものであろう。故に、その折には、まだ、石棺は、健在していた筈である。

また、火葬骨容器として、木箱を想定、その証左として、鉄釘を挙げているが、鉄釘は、木棺の追葬を想定すれば、よろしかろう。むしろ、薬壺型のそれの様な立派なものでなくとも、通有須恵器の転用を想定すれば、よろしいであろう。それさえも、盗掘によって失われたもの、その所在地点に、ザラザラと火葬骨を放出、容器のみを持ち去ったのであろう。

以上の批判点を勘案、この古墳の変遷の卑見を示すと、

第1次埋葬	石棺
第2（～？）次埋葬	木棺の追葬 玄室の南半 羨道も可能
第3次埋葬	火葬骨の安置 まだ、石棺は健在 皇朝十二銭
石棺の棺石材の盗掘	石材利用の目的の専門石工集団による盗掘
多量の油皿を入れた時期	土俗信仰
近世以降	崇拜の対象外 塵捨場 内部の堆積

皇朝十二銭によって示される平安時代初期は、平城京から、長岡京へ、更に平安京へ、遷都の連続の上に、皇位継承問題、藤原氏の内紛と言う大変動の渦中であって、子孫による祭祀も断絶した状態、村人からも咎められる事もなく、公然と盗掘が行なわれたのであろう。

また、この時代は、新都の造営、密教寺院の建立、道路や河川の整備と、未曾有の建設ブームの台風の下、石材の需要も大きく、それに煽られて、棺石材を目標とする専門の石工集団による盗掘が行なわれたものと推測する。この石彫品の制作者も、盗掘の噂を耳に、盗掘現場に急行、この凝灰岩の棺材を入手（購入？）したものと思われる。

故に、火葬骨の安置、盗掘、石彫品制作者の棺石材の入手、更に、当然の事として、その彫成と、継続的ではあっても、ほとんど同時に進行したものと推測するのである。

### 3. 面貌の構成

この石彫品は、現在、堀川高校グラウンドのバックネット裏の小祠に安置されており、高校の許可を得て、観察と撮影する事を得る。

この作品の、長さ65cmと言うのは、石棺側石の高さを示すものであるのかも知れない。しかし、厚さ16cmと言う数値からは、側石か底石かの判定は不可能であろう。

厚さ16cmの角柱の一面の上端に、楕円形的面貌を刻む。顎の下を、少しく深く彫り、少しく立体感を提示するが、全体としては、楕円形の平板な面貌を、角柱の上端に添付した感を与える。その正面観は、完全と形容し得る程の楕円形ではあるが、その縦の中軸線は、わずかに（10～20度）、左に振れており、石柱の縦中軸線に平行ではない。

各部の観察を行なう事にしよう。まず、頭頂に、不規則な凹凸が看取されるが、それは、毛髪を示すものであろう。この作品が、僧形でない証左であらう。また、両角の表現を欠く点は、この作品が、仏像の世界に属する所謂「鬼面」ではない点を示すものであろう。

次は、この作品の最大の特徴である「鼻曲がり」である。顔面の縦の中軸線に対して、約30～40度、大きく左に振れている。その曲がりの程度は、制作上のミスと言う以上であり、明らかに、意図的である点が汲み取れるであらう。

三として、額部は狭く、眉も、耳も表現されていない。

四として、両眼は、杏仁形の輪郭を太く線刻、眼球の表現を欠く。両眼を結ぶ横中軸線は、面貌の縦中軸線に対して、少しく（10～20度）、右下がりである。

五として、口唇部を見ると、肉厚、接合線を太く刻し、全体として、盛り上がりの印象を与える。その間に、舌か歯の表現とも思われる、横長の不規則な突起が認められる。口唇部の横中軸線は、両服部のそれに平行、少しく右下がりである。両牙の表現に欠ける点は、両角と同様である。鼻梁と口唇部の間隔は正常である。顎部も正常な表現である。髭の表現はない。

六として、両頬は、弛みは認められないが、彫成の第一段階の荒削りの痕跡を残した状態で、放置されている。

七として、この石彫品は、面貌の表現のみを制作の目的とするもので、顎部以下は、彫成の計画には存在しなかったと見るべきであらう。

この節の末尾に、この石彫品の本質の一端に触れておきたい。それは、埴輪や仏像の様な彫刻においては、芸術（と言う意識の有無は別の問題としても）としての完成をめざして、その制作に努力するのである。その典型的な作業は、最後の「仕上げ」である。その一例として、肉体表現における皮膚の部分の平滑さであらう。頬部や額部をなめらかに表現したいと言う制作者の願望である。埴輪や仏像を見れば、明白であらう。それが、この作品には、完全に欠落しているのである。

その「完成への最後の仕上げ」を欠くという事は、この作品が、社会の監視の中において、制作されたものではなく、あくまでも、全く個人的な世界の中での制作に終わった事を明示するものであろう。大仏師の下での修業の後、合格作品の提示の後に独立と言う仏師の人生とは、全く別個の人生の所産であると断言し得る所であらう。

#### 4. 歪曲の方程式

さて、以上に述べた面貌の諸要素の総括として、「鼻曲り」を構成する原則とも呼ぶべきものを提示しておきたい。

図形には、必ず、中軸線が存在する。その存在が、見る者に、安定感を授与するのである。面貌を構成する各部の中軸線が、平行・直角・対称（上下・左右）であれば、その安定感が増幅する。この石彫品の歪曲は、各要素が、この関係、直角・平行・対称を提示しない点に起因する。

その歪曲の第一は、面貌の輪郭の楕円形の縦中軸線が、石柱面の中軸線と、わずかだが、平行で

ない点である。

その第二の、そして、最大の歪曲は、言うまでもなく、鼻梁の中軸線が、面貌の楕円形の輪郭の縦中軸線に対して、大きく、左に振れている点である。

その第三の歪曲は、両眼と口唇部の横中軸線で、平行するが、共に、右下方に傾く点である。

以上の歪曲は、要約すれば、カタカナの「エ」の字に還元し得るであろう。その縦線は、鼻梁の縦中軸線、上の横線は、両眼の横中軸線、下の横線は、口唇部の横中軸線である。この3条が平行・直角・対称を保持しない所に、歪曲が生じている、と言うよりは、作為的に崩していると見るべきであろう。

この作為は、これを見る人に与える心理的效果を念頭に置く作業としか考えられない。心を素直に、この像を直視するならば、「醜怪」と言う語がふさわしいであろう。

この石彫品の制作者は、その人生において、人物埴輪を目撃する機会は存在しなかったであろう。しかし、仏像は、忌諱さえしなければ、多くの機会が与えられたであろう。故に、この石彫品の制作者は、慈悲の具現たる温容へのアンチテーゼ、つまり、「反仏像」的表現の具現化に成功しているのである。その反仏像的表現の震源の追求が、この小文の趣意である。

なお、これと同様の「鼻曲がり」の例品を提示しておく。図2の1は、岩手県時前台遺蹟出土の縄文時代の土面（註2）であるが、見事な曲がり様である。民俗学者には、いたずら者のコミカルな役を予想する人もあるが、日々の糧の獲得も困難な状態にあっては、やはり、魚介類の不漁、鹿等の獲物の減少等の不幸を招く凶神と解する方が自然であろう。なお、ギリシャの仮面劇で、鼻曲がりの例品が存在するとの由である。

この節の末尾を借りて、牛祭（註3）に触れておきたい。この祭礼は、京都太秦の広隆寺の大酒神社の神事、同寺の護伽藍神である摩多羅神を祭る。五大尊を示す異形の面を付けた僧の一人が牛に乗り、4人がそれを囲んで本堂を巡り、祖師堂の前で、祭文を読む。江戸末期に廃止されていたが、富岡鉄斎が復興した。図1の4は、その祭礼の屏風絵である。鬼面の使用が、この石彫品と関連するかと考えた事もあったが、どうやら、無関係な様である。

## 5. 柱頭装飾の諸例（図2）

面貌の下の角柱の表面の凹凸は、意図ある加工の痕跡とは認め難く、石棺材を切断した折のそれであり、この石彫品は、その当初より、頸部以下の制作の意図を欠落、歪曲された面貌の彫出のみが、その制作の唯一の目的であったと見るべきであろう。

柱状（角柱と円柱）台の頂部を加工、あるいは、物象を安置、宗教的祭礼に供する例は、少なくない。その最も著名な例は、アショカ王の法勅柱であろう。

図2の3は、新バビロニアの円筒印章（註4）。式服の神官が、右手にコップ、左手に小さな容器を持ち、テーブル状の供物台の前に立つ。その後の、柱状台の上には、右端を欠落するが、礼拝の対象たる神格の新月が看取されるのである。





1



2

3



4

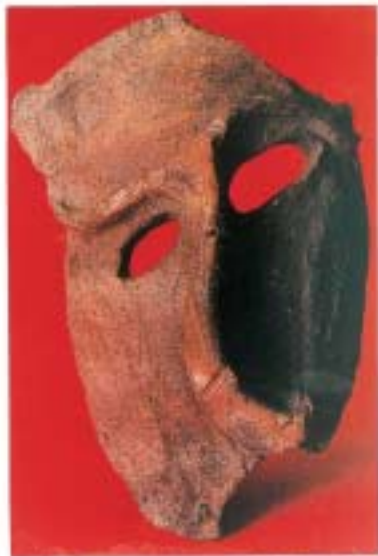
図1 広沢古墳 石彫 石室  
牛祭 屏風絵



5



6



1



2

3



4



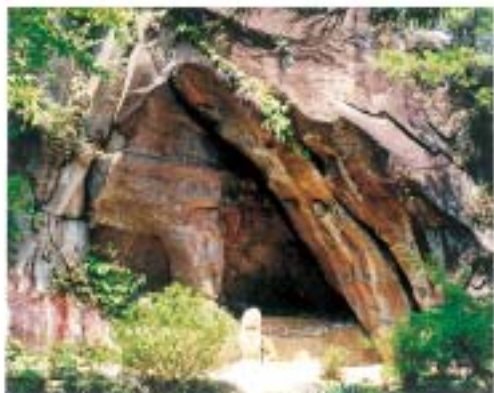
7



6



5



8

9



図2 参考 土面 メッカ 鵜殿 他



図2の2は、石川県能都町の真脇遺蹟出土の縄文時代の人面彫刻の木柱（註5）。頂部に顔面を彫刻、アメリカ西海岸のトーテム・ポールそっくりとの由。残存2.5m、制作時は、まるで電柱の様であった事が想像されよう。実見を切望している。

図2の4・5は、滋賀県大中ノ湖遺蹟出土の弥生の木偶（註6）、高さ35.6cm、後期との由。温和な表情が、次代の埴輪に継承された事を、直感的に感得されるであろう。

図2の6は、奈良県唐古遺蹟出土の弥生時代の器台、後期初との由。器形の曲線の流麗さと緻密な装飾に飾られているのは、供献の対象たる祖霊等の神格に対する尊崇の念に基づくものであろう。それに対して、広沢古墳の石彫品の柱状部は、装飾はおろか、棺石材から切断された折の凹凸あるまゝに放置されているのである。面貌部の神格（と仮定すれば）に対する尊崇の念の欠如を明示するものであろう。なお、この器台を一瞥、その原型が樹幹に由来、更に、円筒埴輪にへと展開した事が看取される所ではあるまいか。

図2の7は、大分県臼塚古墳の墳上に立つ石人、胴鎧の埴輪を、阿蘇溶岩の八女石に置換したものの。広沢古墳の石彫品へ、血脈を伝えた存在である事を察せしめるであろう。

以上の諸例により、古今、東西を問わず、柱頭装飾の例は多く存在、広沢古墳の石彫品が、突如として出現したものではない点を感じし得る所であろう。

## 6. メッカのジャムラ石柱（図2の9）

メッカがイスラム教の最大の聖地であり、その地への巡礼が、信者としての義務であると、ムハンマドによって規定され、それが、信者にとって、人生、最大の夢であり、実現した者は、ハッジと呼ばれて、尊崇的となる、と言う事は、よく知られている。

しかし、その巡礼の具体的な内容については、あまり、知られていない。メッカに到着後、多少の増減は別として、12日間に、ムハンマドの規定した諸行事を、規定通りに実行する事が義務とされているのである。その詳細については、註7文献を参考されたい。この小文においては、投石の祭事についてのみ記述する。

巡礼の第9日、アラファを出発、ムズダリファで宿泊、その間に、小石70個を採集する。翌日、ミナに赴き、投石の祭事に参加する。石柱は、摺鉢状の凹所の下底の中心点に樹立（図2の9）する。

3座の石柱の内、西端の最大の石柱に投石する。石柱は、悪魔の象徴である。その後、犠牲を屠り、断髪、イフラム（白衣）を脱ぐが、その間に、もう一度、残りの2座の石柱に赴き、投石する。

この投石の祭事は危険なので、石は掌中に入る程度の大きさ、石柱の根元に投げる事、女性・子供・老人は、男性に代行を依頼出来る事、と言う様な危険予防策は講ぜられているが、興奮した大群衆の殺到で、毎年、多くの死者が出るとの由である。

石柱は、コンクリートの角柱の中に、多くの立方体の石塊を塗り込めている。高さは、5m以

上あるかも知れない。頂点は、方錐形、つまり、ピラミッド状を呈し、古代エジプトの新王国のオベリスクに瓜ふたつである。

ピラミッドは、古代メソポタミアのジグuratに祖型を有し、ジグuratは、水源信仰としての山岳に由来する（註8）が、奇しくも、このジャムラ石柱の頂上の立錐形も、山岳の表現であると言う酷似点を共有するのである。

それを証明するのが、ムハンマドが最初に啓示を受けたヒラー山である。この山は、低い丘陵と言うよりは、巨大な岩塊と呼ぶべきであるが、その麓に、厳格な戒律で有名なワッハーブ派の告示が示されているが、それには、「礼拝をするな」とある由である。これは、明らかに、厳禁の偶像崇拜に、山岳信仰も含まれていた事を明示する。但し、この点は、十分に浸透していないで、ムハンマドの規定した巡礼の諸行事に含まれていないヒラー山に、恣意的に赴く者も多い様であり、特に、東南アジア出身者に多い（アラビア語の掲示が読めない？）（註9）らしい。故に、ジャムラ石柱の形態は、山岳信仰の偶像崇拜に該当する点の警告と解すべきであろう。

以上、かなりの字数を費やして、このジャムラ石柱の投石祭事を紹介したのは、この祭事を媒体として、広沢古墳出土の石彫品の本質を明らかにしたいが故である。それは、フィルターの使用が画像を鮮明にし、染色によって、細胞内の遺伝子が明瞭になるのに比較出来ようか。

## 7. 古き神々の亡霊

どの宗教においても、その初段階においては、先行する諸宗教との競合が存在した。キリスト教においても、親とも言うべきユダヤ教、アジア系のミトラ神やイシス女神、ローマ神話、皇帝崇拜、北欧のドルイド教が存在していたのである。イスラーム教においても、ペルシアのゾロアスター教やアナヒータ女神、同血液型とも言うべきユダヤ教、ビザンチン帝国のキリスト教、そして、アラビアの八百万の神々たる精霊ジン（jinn）（註10）の存在がある。

わが国の仏教史においては、如何であろうか。日本書紀卷第二十一、崇峻天皇二年七月の物部守屋大連の敗死の記載（註11）以後、在来の旧宗教の新来の仏教に対する抵抗の記載を欠くのである。奇異としか思われない所ではあるまいか。信じ難いと言うべきであろう。

「多の螢火の光く神、及び蠅声なす邪しき神有り。復、草木嘯くに能く言語有り」（註12）と言う状態は、仏法伝来と同時に、消失したのであるか。そうではあるまい。それは史書の記載の欠落に過ぎないであろう。史書の記載の欠落を補填するのが、考古学や民俗（族）学や人類学の責務である。

現在では、神話の知識は、記紀を読む事によって、獲得する。しかし古代において、記紀を「読む」事は、ほとんど不可能であったとしか、考えられない。故に、その時代において、その「神話」が生きておれば、その知識も存在したと言えるであろう。どの時代においても、人々の宗教に対する関心の中心は、死への恐怖と死後の世界に対する好奇心ではあるまいか。

死後の世界を活写した神話と云えば、伊奘諾尊の黄泉の訪問と禁忌を犯して、灯火を点じて、死

後の世界の現実を目撃、そして、泉津醜女の追跡からの逃亡と言う、神話学の「逃走型」と呼ばれる神話（註13）が記載されている。世界に広く分布するが、わが列島には、漢籍の知識と共に将来されたのであろう。道教で尊ぶ「桃」が登場するのが、その証左であろう。そして、この視覚的舞台を提供したのが、古墳時代後期の横穴式石室であった事は、早くより、喜田貞吉博士や橋健自博士等によって、注意されていた点（註14）である。

さて、広沢古墳の石彫品が、横穴式石室より出土した点を、何よりも重視しなければならないであろう。もしも、この石彫品が、（低級でもよい。何らかの）神格を有する存在であったと仮定すれば、この横穴式石室において、その祭祀が挙行されたと言う蓋然性は、低いものではあるまい。この推定に神話を重複させると、この石彫品は、伊奘冉尊であるか、あるいは、泉津醜女であるかと言う小結に到達するであろう。この石彫品の面貌の醜怪であり、芸術としての完成に向かう努力に欠ける点も、首肯し得る所となろう。

## 8. 制作者像の推定

さて、この石彫品の面貌の醜怪な点と、横穴式石室の出土と言う条件の上に、神話を重複させるならば、伊奘諾尊の黄泉の訪問と逃走に登場する、伊奘冉尊か泉津醜女と言う候補が浮上するのである。但し、それも、ひとつの候補にすぎない点を確認しておきたい。

そして、この石彫品を樹立、祭儀を挙行した人物は、恐らくは、その制作者であったと言う点については、容易に、諸位の御同意を得るであろう。

奈良時代後半の仏教については、「三宝の奴」と公言した聖武帝の御代、毘盧遮那仏の鎮座まします、総国分寺たる東大寺を中心に、南都諸宗の伽藍、全国の国分寺・国分尼寺、そのすべてが、鎮護国家を祈願する国家仏教であった...と、受験日本史には、明記してあった。しかし、どうも、その様な単純な状態ではなかったらしい。

まず、毘盧遮那仏、つまり、“Vairocana”は、光明遍照と訳すが、本来は太陽の意であり、華嚴経の教主であり、法華経の大日如来と変わる所は、ほとんどないのである。それは、両大師の帰国以前において、密教的信仰が潜在していた事を示す。それ以外にも、後には、聖武帝に屈伏、東大寺造営に協力するが、行基の言動は、国家仏教のそれでない事は明白である。また、法道上人の様に、神仙化した存在も見られるのである。この様に、換言すれば、「在野」の仏僧が、予想以上に出現、次代の仏教の準備的活動を行なったのである。それ以外にも、試験に落第、官僧になれなかった落第坊主も多かった事であろう。

さて、広沢古墳出土の石彫品を樹立、祭祀を行なったのは、官費で、ぬくぬくと暮らす官僧ではない事は、明白である。上述の様な「在野」の乞食坊主が、村人に対して、古き神々の亡霊と決別、仏道に入る様に、熱弁を振った事と思われるのである。その説法の中で、神話中の来世観を非難、仏浄土を説いた事と推察する。つまり、この石彫品は、芝居の敵役として、その劇中に登場したものであるであろう。その可能性のヒントを提示するのが、ジャムラ石柱である。それに対しては、投石・

足蹴・唾棄の様な過激な行為の有無は不明ではあるが、ていねいに扱われなかった事だけは、明白であろう。故に、損耗が激しく、恐らく、当初は木像であったものを、石像に直したものとする。美術に暗い筆者は、木彫の痕跡を、この石彫の上に発見出来ない。御教示を乞う。

この「在野の乞食坊主」を彷彿せしめる遺蹟が存在する。佐賀県相知町の鵜殿磨崖仏（註15）、図2の8に示す。作風は拙劣、美術としてではなく、民間信仰の遺蹟として、再評価さるべきであろう。洞窟ではなく、岩陰と呼ぶべき壁面に、稚拙な諸仏を刻む。岩陰に住み着いた乞食坊主が村人のわずかな布施を糊口のたよりとして、美的評価や時間を無視、信心を鑒として、制作に励んだものであろう。円空・木食の同類であろう。この遺蹟を初見した折、広沢古墳の石彫品の制作者を連想したのを記憶する。

## 9. 小 結

仮説と言うよりは、錯誤に空想を重複させた小文に、結論と言う語は控えるべきであろうが、今後の研究の出発点として、要約しておきたい。

1. 古墳の石棺材の再利用は、後代の石棺仏（註16）にも見られるが、その安易な入手法は、原材の鉾山開発の至難の回避を示しており、わが文化が、木の文化であり、石の文化ではない点を示すものでもあろう。
2. 平安時代初期と言う年代の推定を是とするならば、この石彫品は、希有の遺品である。わが列島の石仏の歴史は、白鳳時代以後の歴史を有しているが、平安時代前半は、滋賀県栗東町の伯坂寺磨崖仏（註17）を唯一の例外として、確認されていないのである。
3. どの宗教においても、一柱の神格を表現する場合には、必ず、その尊崇する所の神格を表現する。たとえば、イスカリオテのユダの単身像は、存在しないのである。その例外が、メッカのジャムラ石柱と（筆者の推定では）広沢古墳出土の石彫品である。それが彫成された事は、目的が存在していた事を意味する。それは、その「尊崇されない」点であろう。
4. ムハンマドは、群衆心理を扇動、劇的效果を演出する天才であるが、どの宗教においても、その変革期においては、この傾向を帯びた激情家が出現した。

カイロ博物館の1階の第3号室の、Akhenaten 王の巨像の鬼気迫る怪奇な容貌に接した者は、その生涯、忘れる事は出来ないであろう。

「荒野に叫ぶ者」洗礼者ヨハネは、王宮の退廃の中、猟奇的な死を遂げるのである。

自説の撤回を拒んだヨハン・フス、ルネッサンスの名作を火中に投じたサヴォナローラは、ともに、火刑に処されたのである。

灼熱の鉄鍋を冠せられても、日親は、將軍義教に屈しなかったのである。

仏教が、民衆に浸透、真の国民宗教として、定着するまでに、多くの激情的な宗教家の存在が予想されるであろう。平安初期と言うのは、まさに、その様な時代であったのではあるまいか。この石彫品を、半壊の石室の中に樹立、民衆に説く乞食坊主を予想するのである。

5. 新興宗教が、先行の宗教と競合した事は、当然に予想される事ではあるが、その宗派の美化の過程に失われる場合が多い。文献よりは、遺蹟・遺物や民間信仰の世界に求めるべきであろう。
6. 後期の横穴式石室は、最後の追葬者の搬入の後も、子孫による墓前祭が断絶するまで、その生命を維持していると見るべきであろう。更に、後代の石材や空間の再利用と言う点も、等閑にすべきではあるまい。
7. 芸術、美術と言う語は、その制作者、その時代と共に定義されるべきであろう。故に、その時代の最高の技術を駆使、最高の作品を提示すべく、努力する者と言う事になろう。それに反比例、この石彫品の制作者は、その努力を完全に放棄していると思われぬ。同時代の仏師と比較すれば、明白となろう。
8. 神話研究の難解さは、まず、民族のそれか、漢籍からの借用か、と言う問題がある。次は、その起源の地域の推定であるが、筑紫・日向・出雲・瀬戸内とは言いが、大和朝廷に採用され、記紀に記載されて、その境界が不分明となっている。三としては、記紀に記載された折に、その信仰が存在しており、換言すれば、「生きている」神話と、既に信仰されなくなった「死んだ」神話とに、区別せねばならないであろう。この様な、難解きわまりない諸問題の根底に存在する、万人の避け難い人生の最大事、生死と死後の世界への好奇心の神話こそが、石室の残骸の空間で展開される祭事であろうと推察、伊弉諾尊の黄泉訪問と逃走の神話を設定したのである。
9. この石彫品は、祭事の激しさ（その内容は不明ではあるが）のもたらず消耗の故に、原型の木彫品を石彫品に改めたと推測しているが、美術に暗い筆者は、その痕跡を発見出来ない。重ねて、諸位の御教示を乞うておきたい。

## おわりに

諸位は、少年、少女の折、アラビアン・ナイトの「アラディンと魔法のランプ」の世界を楽しんだ記憶を有する人は多い事であろう。そして、その「ランプの精」に、親しみを感じられた事であろう。この「ランプの精」も、前述の、アラビアの八百万の神々たる、ジン (jinn) と呼ばれた精霊の一柱である。但し、シャイターンと呼ばれて、ムハンマドに排斥された凶悪なそれではなく、心優しく、愛される精霊である。彼は、アラディンに財宝を、最後には、美しいお姫様をプレゼントしてくれるのである。

この小文を脱稿した現在、筆者にとっては、広沢古墳出土の石彫品は、正に、ランプの精に匹敵する存在である。この小文のテーマを恵与してくれたのである。

また、これを彫成した、ホームレスの乞食坊主にも、感謝の辞を呈上せねばならぬと感じている事を申上げて、この拙い小文の筆を擱く事にしよう。



## 註

- 註1 樋口隆康「京都嵯峨野広沢古墳」京都府文化財報告書 第廿二冊 京都府教育委員会 昭和35年
- 註2 朝日百科 日本の歴史1 原始・古代 岸俊男編 1989年 朝日新聞社
- 註3 総合仏教大辞典(上) 園田香融編 法蔵館 1987年
- 註4 大英博物館展図録 朝日新聞社編 朝日新聞社 1990年 図版35
- 註5 註2前掲書
- 註6 拙論「アルタイ地方の屋敷神像に學ぶ」筑紫女学園大学・短期大学 国際文化研究所 論叢 第17号 2006年 弥生時代の木偶について論じたので、参考にされたい。
- 註7 「MECCA メッカ巡礼ー祝福のメッカと光のメディナ」集英社 1997年  
記述 サイド ホセイン ナスル博士 1933年 テヘラン生  
ジョージ・ワシントン大学教授  
翻訳 小杉 泰 博士 国際大学教授  
撮影 野町 アリ 和嘉 フリーランス写真家  
的確・詳細な解説 鮮明・豊富な図版 イスラム理解の最高の文献
- 註8 拙論「ジグurat少考」筑紫女学園大学・短期大学 国際文化研究所 論叢 第11号 2000年 その水源信仰の本質とピラミッド成立の端緒の点等を論じた。
- 註9 註7前掲書 64ページ参照
- 註10 世界宗教大事典 山折哲雄他監修 平凡社 1991年
- 註11 日本書紀下 日本古典文学体系68 坂本太郎他 校注 岩波書店 昭和40年  
崇峻紀 二年七月の条
- 註12 日本書紀上 日本古典文学体系67 坂本太郎他 校注 岩波書店 昭和42年  
巻第二 神代下
- 註13 註12前掲書 神代上 第五段
- 註14 古墳の話 小林行雄 岩波新書342 昭和34年  
日本の発掘 斎藤 忠 東大新書45 1963年
- 註15 日本石造美術辞典 川勝政太郎 東京堂出版 昭和53年
- 註16 註15前掲書
- 註17 註15前掲書